

「土偶を読む - 130 年間解かれなかった縄文神話の謎」を読んで

原田義則（3 組）

2021 年のサントリー文芸賞を受賞した竹倉史人著「土偶を読む - 130 年間解かれなかった縄文神話の謎」（晶文社）を読み、眼から鱗の取れる感動を得ました。著者は人類学の独立研究者で上田高校 60 期の竹倉征祠さん（真田在住）のご子息です。

土偶は縄文時代に大量に造られた素焼き（一部は着色）のフィギュアですが、諸説あるものの、その正体については確かなことは分かっていませんでした。著者は人類学の観点からイコノロジー（図像解釈学）を考古学に取り込むことで「土偶は縄文人が非常に大切だと考えていた食べ物を表すもの（食物の擬人化）」との結論に達し、この新説を世に問うものです。

本に掲載された実例写真を見て貰わないと分かり難いのですが、沢治いの集落から出土するオニグルミ様土偶、貝塚近くの集落から出土するハマグリ（⇐浜の栗）様土偶のほか、クリ、トチノミ、ヒエ、イネ、サトイモなどの縄文人が生きる上で極めて重要だった食べ物をかたどった土偶（アイコン）は豊作豊漁を願う縄文人の祭祀の対象だったのではないかと、またその際、一部の土偶では「生産性を暗示する女性の体つき」を象ったと言うのが著者の主張です。

これまでは考古学の研究対象と捉えられて来た土偶に対し、「門外漢である」著者の全く斬新な説は否定的に捉えられる向きもありますが、形態の類似性（相似性）とその食べ物が得られた地域と年代の相関関係を緻密に解析しており、私には強い説得力を持つものでした。昨今、各地で活動している「ゆるキャラ」は土地の名物を象っていて、中には土偶にそっくりのものが散見される、作物を擬人化する際の人の感性は縄文人でも現代人でも変わらないとの著者の観察的を得たものと感じました。

私は生化学・分子生物学の研究がしたくて大学に入ったのですが、実のところ一番好きだった分野は人類学でした。しかし、「人類学を専門として修めても就職先は極めて限られ、真面目な生活は出来ないだろう!？」と考え、専門分野の選択の際にはそちらへの進学は諦めました。これに対し著者はその専門を修めた後も大学での職は持たず、いわゆる権威からの圧力、権威からのお墨付きを要求する各勢力からの圧力にも屈せず、独立研究者として活動を続けていることに強い感動を覚えました。ご一読をお勧めします。

以上

2022 年 3 月 1 日 記

